

# 安土城跡順路図



所要時間 1周約45分から90分

## 安土城跡

織田信長公が天下統一を目標に天正四年（1576）一月十七日、重臣である丹羽長秀を総普請奉行に据え、標高199mの安土山に築城させた平山城。岐阜城よりも京に近い利便性があり、北陸・東海の要所であった。

現在は四方とも干拓により陸地となっているが、当時は琵琶湖の内湖（伊庭内湖・常楽湖）に囲まれ、南方のみが開けた地形であった。

そのわずか三年後天正七年五月、わが国で初めて天守閣（天主閣）をもつ安土城が一応の完成をみせた。

ところが、天主完成から三年目の天正十年（1582）六月二日未明、中国毛利へ出陣途中の明智光秀の謀反により信長公は京都・本能寺で自刃（四十九歳）。

混乱の中六月十五日、天主などを焼失、一夜のうちに落城した。原因は織田信雄が誤って焼き払ったという説や、敗走する明智光秀軍による放火という説などがある。

城跡：大正十五年十月二十日 文部省（当時）指定の史跡となる。  
昭和二十七年三月二十九日 文部省文化財保護委員会（当時）が特別史跡に指定。



特別史跡

# 安土城跡



特別史跡安土城跡 惣見寺 第2版

発行/ 惣見寺 発行日2007年1月1日

SER No 870252

# 惣見寺

### 注意事項

安土山は山全体が国の特別史跡に指定されておりますので以下の点に、ご注意ください。

- 1 山中にトイレはございません。必ずご出発前にお済ませください。
- 2 植物や石の採取は禁じられております。ごみはお持ち帰りください。
- 3 火気厳禁です。お煙草は御慎みください。
- 4 石段は急で危険な箇所であっても安全策を施すことができません。史跡内では各自、自己責任で御入山ください。
- 5 立ち入り禁止区域には絶対に入らないでください。
- 6 蜂やマムシが出没することがあります。ご注意ください。

# 安土城跡ガイドマップ

## 大手道周辺



## 惣見寺

臨濟宗妙心寺派の寺、遠景山と称す。安土城築城の際（天正四年）、信長公が他所より移築し安土城本丸の西方の峰に自らの菩提寺にしたと伝えられる。天正十年の天主崩落の際も焼け残ったが、安政元年（1854）11月16日 火災により本堂などほとんどを焼失。今は礎石のみが三重塔の北に残っている。その後、昭和七年仮本堂が大手門近くの伝徳川家康邸跡に建てられ現在に至る。

寺宝として信長公所用の永楽銭を散らした銀象眼の鉄鐙（まけずのつば）信長公の陣羽織が伝えられている。

鉄鐙：大正9年4月15日特別保護工芸品に指定 重要文化財



◎大手道

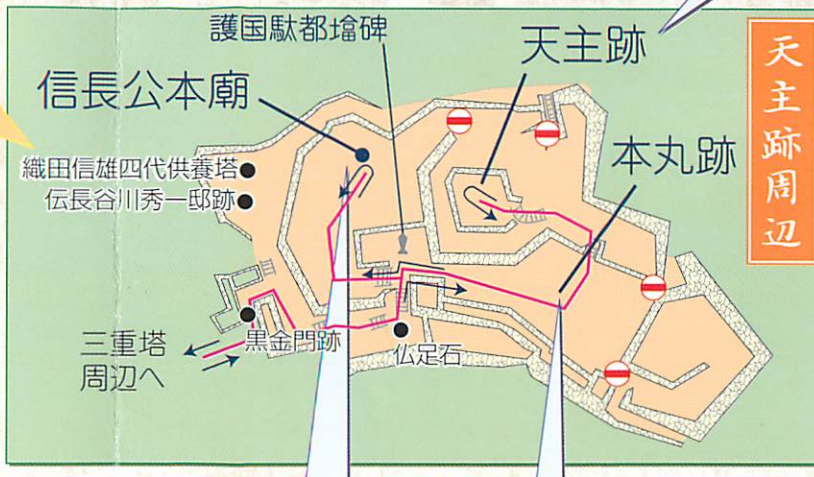


◎織田信雄四代供養塔

## 天主跡

背丈ほどの高さの石垣に囲まれ東西、南北それぞれ約28mの台地。今は礎石が1,2mおきに整然と並ぶだけであるが、この部分は天主の穴蔵（地階の部分）にあたり、その上にさらに大きな天主がそびえていた。五層七階（地上6階地下1階）の天主はイエズス会の宣教師ルイス・フロイスによればヨーロッパにもあるとは思えないほどの壮大さであったといい、高さ33mの木造高層建築は当時、わが国で初めてのものであった。

内部は信長公の御用絵師、狩野永徳の豪壮な障壁画や装飾を配していた。



## 天主跡周辺

## 三重塔周辺



## 三重塔

山の中腹に見える三重塔は三間三重の塔で屋根は本瓦葺き。室町時代の建物で棟柱に、享徳三年（1454）建立、天文二十四年（1555）修理の墨書きがある。天正三～四年に信長公が甲賀の長寿寺（甲賀市石部町）から移建したものとされている。慶長九年（1604）豊臣秀吉の次男、秀頼が一部修理している。大正三年九月、突然三層目の屋根と一・二層の軒が崩落したがすぐ修復された。



三重塔：明治34年3月27日 特別保護建造物に指定 重要文化財

## 二王門（楼門）

棟木に「元亀二年（1571）七月甲賀武士山中俊好建立」とある。屋根は入母屋造り、本瓦葺き。門内に安置されている金剛力士像も門同様国指定重要文化財で頭部の内側に応仁元年（1467）因幡院朝作の造像銘が残っており、信長公が天正年間に甲賀から移した。



楼門：明治36年4月15日特別保護建造物に指定 重要文化財  
木造金剛二力士立像：明治44年 特別保護彫刻に指定 重要文化財

## 信長公本廟

天主跡西下の伝二の丸跡に信長公の本廟がある。重臣、羽柴秀吉は天正十一年一月三法師に年賀を表すべく登城し、翌二月信長公ゆかりの安土城二の丸跡に太刀、烏帽子、直垂などの遺品を埋葬して本廟とした。そして六月二日の一周忌には織田一族や家臣を集め、盛大に法要を行った。



## 本丸跡

安土城天主から少し降りたところにある本丸御殿跡。「信長公記」によればこの建物には天皇を招き入れる「御幸の間」があったと記載されている。その後の調査で慶長年間に改修された京都御所内の天皇の住居である清涼殿と酷似した構造になっていたことが判明、さらに礎石上の柱痕からこの建物が高床式であったこと、周囲の伝三の丸跡や天主取付台と渡り廊下で繋がっていたことなどが明らかとなる。

◎本堂跡からの眺め